

短期大学における日本語基礎能力育成のためのコースデザイン試案 —戸板女子短期大学の初年次生必修授業を事例として—

村木 桂子

総合教養センター

はじめに

本稿では、高等教育初年次における日本語能力育成のため、これまでの授業実践から得られた知見をもとに、初年次生必修授業の効果的なコースデザインを検討する。ここでいうコースは池田ほか（2001）に倣い、15回の一つの学期にわたって展開される科目のことを指し、コースデザインとは「科目全体の内容を設計すること」とする。

大学教育のユニバーサル化にともない、高等教育の中核は研究にあるというフンボルト理念は過去のものになりつつあり、学生の多様化が進むと同時に多くの高等教育機関はいまや単に教育の場としてだけでなく、実社会に向けた能力開発やキャリア経験を支援する場としても期待される傾向にある。そのような時代に、高等教育初年次における効果的な日本語能力育成のためのコースデザインを検討することは意義のあることだろう。

筆者は短期大学¹で初年次教育および日本語能力育成の授業である「スタートアップ演習A」²に携わって3年目となる。村木（2017）では、実社会で働く人たちによるアンケート結果をもとに短期大学生に求められる日本語力について報告した。「聞く・話す」の分野では、①情報を整理し簡潔に述べる力、②言い換える力、③TPOをわきまえた言葉を選び使用する力、そして「読む・書く」の分野では、①要約する力、②話し言葉と書き言葉を区別する力、③文字情報を的確に受け取り処理する力、これらが課題と

して確認された。これを踏まえ、村木（2018）においては、その要素を総合的に含むトレーニングとして要約の授業に着目して要約指導の改善案を提案し、その実践を試みたが、はかばかしい結果は得られていない。そこで今回は視点を変えて、要約の授業のみに焦点をあてるのではなく「スタートアップ演習A」の授業15回全体を捉え直し、短期大学生の日本語能力育成に資するコースデザインを模索する。

1. 初年次教育における日本語力育成のための学習項目

ここでは、初年次教育における学習項目にはどのようなものがあるのか、またそれらはどのような組み立てで広く一般に提示されているものなのか、市販の大学初年次生向けテキスト内容を整理、比較することによって確認する。

今回選んだ3冊は版を重ねているテキスト、また長期間にわたり好調な人気を持続しているテキストである³。

¹戸板女子短期大学。ここでは産学連携プロジェクトを2017年から1年次の必修授業に取り入れ、企業や地域と連携し学生のアイデアや製作物を社会に還元するだけでなく、その活動を通じて、学生がより多くの社会的経験を積む機会につなげることを目標にしている。

²「スタートアップ演習A」は前期、後期科目として「スタートアップ演習B」がある。

³丸善、三省堂の2書店において、ここ数年で販売数15位以内に入っている大学生向けテキストから選んだ。

表1 高等教育初年次のためのテキスト内容（目次の章の部分）の比較

| | A.『知へのステップ—大学生からの スタディ・スキルズ』第5版 くろしお出版2019 初版：2002年 | B.『アカデミック・スキルズ』第2版 慶応義塾出版会2012 初版：2006年 | C.『大学生学びのハンドブック』第4 版 世界思想社2018 初版：2008年 |
|---|---|---|---|
| テキ スト の ね ら い | 「大学で「学ぶ」ためには聴く・読む・書く・調べる・整理する・まとめる・表現する・伝えると考えるの9つの力が必要だとして、それらの力が、段階的に身につけられるように構成」されたテキスト。半期の授業のゴールが「ワープロで作成したレポートが提出できる」ことに設定されている。平成13～14年度科学研究費（課題名：「大学入学時におけるスタディ・スキルズの教材開発と運用に関する研究」）の研究成果の一部。（はしがきiiiより） | 「大学での授業における知的生産技法の基本、すなわち「調べ」「まとめ」「発表する」という一連の作業のやり方をわかりやすくまとめた」テキスト。「自ら問題を見つけ、それを整理して、自分なりに考えて答えを導き出す」ことについて解説されており大学1、2年生の少人数・初級セミナーから上級学年の卒業論文まで視野に入れた内容。3年間にわたる実験授業の成果をもとに作られている。（p.5より） | 主に「大学の仕組みや勉強の仕方について、「高校までとどう違うのか」という観点」から、大学での勉強の仕方について書かれたテキスト。大学での4年間、そして社会に出た後まで視野に入れた内容。卒業までに何度も読み返すことが期待されている。（p.3より） |
| 体裁と視覚情報 | 文章と図表による説明が基本のスタイルである。イラストはない。重要事項はゴシック体で強調されている。モノクロ印刷、B5版。 | 文章で説明するのが基本的なスタイルである。イラストはない。重要事項はゴシック体で強調されている。モノクロ印刷、A5版。 | イラストや表による説明が基本であり、視覚情報が多い。 2色刷り、A5版。 |
| 構成と内容 （※比較しやすいようそれぞれ目次は章までとし、章以下の下位の目次は省略した） | <p>全体の構成</p> <p>第Ⅰ部 はじめに 第1章 スタディ・スキルズとは</p> <p>第Ⅱ部 聴く・読む 第2章 ノート・テイキング 第3章 リーディングの基本スキル 第4章 より深いリーディングのために</p> <p>第Ⅲ部 調べる・整理する 第5章 大学図書館における情報収集 第6章 インターネットにおける情報収集 第7章 情報の整理</p> <p>第Ⅳ部 まとめる・書く 第8章 アカデミック・ライティングの基本スキル 第9章 効果的なアカデミック・ライティングのために 第10章 パソコンによるライティング・スキル</p> <p>第Ⅴ部 表現する・伝える 第11章 プレゼンテーションの基本スキル 第12章 わかりやすいプレゼンテーションのために</p> <p>各章の構成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「この章で学ぶこと」 ・「キーワード」 ・「やってみよう！」（演習問題） ・「解答例」 ・「解説」 ・まとめ <p>まとめでは、「さらに学びたい人のために」として、章ごとのテーマの数冊ずつの参考文献紹介がある。</p> | <p>全体の構成</p> <p>第1章：アカデミック・スキルズとは 第2章：講義を聴いてノートを取る 第3章：情報収集の基礎—図書館とデータベースの使い方 第4章：本を読む—クリティカル・リーディングの手法 第5章：情報整理 第6章：研究成果の発表 第7章：プレゼンテーション（口頭発表）のやり方 第8章：論文・レポートをまとめる</p> <p>各章の構成</p> <p>特に決まった構成項目はないが、各章の終わりに必ず理解度をはかる数問の「テスト」がある。模範解答は用意されていない。</p> | <p>全体の構成</p> <p>第Ⅰ部 大学生のスタディ・スキルズ 0章 はじめての大学生活 1章 ノートのとり方 2章 テキストの読み方① 3章 テキストの読み方② 4章 レポートの書き方① 5章 レポートの書き方② 6章 資料の探し方 7章 大学図書館の使い方 8章 ゼミ発表の仕方① 9章 ゼミ発表の仕方② 10章 大学の試験と評価</p> <p>第Ⅱ部 大学生のパソコン・スキルズ Wordでレポートを作ろう Excelで表やグラフを作ろう PowerPointで発表資料を作ろう メールのマナー</p> <p>第Ⅲ部 大学生の基礎知識 大学生活 Q&A 大学生活は危険がいっぱい 大学用語集</p> <p>各章の構成</p> <p>特に決まった構成項目はなし</p> |

| | | | |
|------------------|--|---|--|
| 文体例（レポートについての箇所） | レポートとは、「調査や研究の結果わかった事実と、それに基づく自分の意見をまとめた報告書」です。レポートは、日記や講義ノート、メモ、手紙などとは違って、ほかの人に読んでもらうものですから、読む人がわかりやすいように、文章の構成をしっかりと考え、筋道を立てて描かなくてはなりません。（p.105） | 自分の自由な思いを述べたものは単なる「感想文」であって、それでは「自らの視点で論じたレポート」と言うことはできない。「自らの視点を持つ」というのは、思ったことを自由に述べることで、主観的な感想を述べることもない。ここで求められている「自らの視点を持つ」ということは、主体の視座を明確にするということである。主体の視座とは独自の着眼点と言い替えても良い。主体の視座の明確化とは、学問的なアウトプットをする場合つねに求められる客観性・普遍性を確保するということである。つまり、「自らの視点を持つレポート」とは独自の着眼点から、説得力のある論理を展開した文章なのである。（P.121） | 大学でのレポートとは、「根拠に基づいて主張を述べた文章」のことです。大学では、「～について賛成か反対かを述べ、その理由を論じなさい」、「～に関連して、2000字程度で自由に書きなさい」といったレポート課題が、さまざまな場面で出されます。（P.36） |
| 予備資料 | 1. ダウンロード可能な音声データ、PowerPoint 資料 2. 巻末資料（切り離し可能） 「年間目標」、 「週間スケジュール」、 「レポート提出チェックシート」、 「プレゼンテーション評価シート」 | 附録：書式の手引き（初級編） 1. はじめに 2. レポートや論文の書式の一般事項 3. 本文の書式 4. 注の付け方 5. 文献表記の方法 | 特になし |

（１）共通することから

３冊のテキストに共通するのは構成内容である。表現のしかたは異なるが、３冊に共通する内容を挙げると、①大学生としての心がまえ、②ノート・テイキング、③リーディング、④大学図書館の使いかた、⑤情報収集、⑥ライティング、⑦発表のしかた、になる。また、A.B.に共通する内容として、⑧情報整理がある。

いずれも権威的なもの言いではなく、初年次生の立場に立ち、複雑さを避けて理解しやすい平明な言葉に置き換えたうえで、詳しい解説を行っている。

（２）それぞれの持ち味

これらの内容の構成は、それぞれの本のねらいに沿った形で提示されている。たとえば A.は「ワープロで作成したレポートが提出できる」という半期の目標に向かって初年次生が迷わないよう、「大学生として自立するための心がまえ」→「テイクノートの基本」→「テキストのリーディング」→「情報収集の技術とその整理方法」→「論文やレポートを書くための基本と効果的な表現方法」→「プレゼンテー

ション」のように、大学ではじめてのノート・テイキングから、レポートを作成するまでの順序に従って構成されている。

B.は「総論」→「情報の調べ方」→「情報の読み方・まとめ方」→「情報発信の仕方」という構成である。「これらの作業は実際には必ずしも単一の方向に進むわけではなく、つねに行きつ戻りつする。したがって、本書はそのときどきの作業に応じてどこから読んでもかまわない。」（p.6）という姿勢である。

C.は高校生活と大学生生活の違いについてからはじまり、「ノートのとり方」→「テキストの読み方」→「レポートの書き方」→「情報の探し方」→「発表の仕方」の構成である。「情報収集」が「書き方」よりも後にあるところが、A.B.とは異なる。このテキストのねらいである「大学は高校とどう違うのか」に焦点をあてたとき、初年次生が興味を持つ順番ということかもしれない。

内容についてだが、ほかの２冊にはないA.の特徴は、ダウンロード可能な音声データ、PowerPoint 資料があるということだ。これは自分のペースで何度

でも視聴することが可能なため、初学者は独習用の大きな手助けとなるだろう。また、切り離し可能な巻末資料（「年間目標」、「週間スケジュール」、「レポート提出チェックシート」、「プレゼンテーション評価シート」）も、A.の特徴である。このテキストには各章に「この章で学ぶこと」「キーワード」「やってみよう！」（演習問題）が用意されており、その解答、解説がある。章の最後の「まとめ」では学びの要点が整理され、「さらに学びたい人のために」において参考文献が複数冊紹介される。これも A.の特徴である。同じ構成が繰り返されるということで、初年次生は安心して学ぶことができるだろう。

B.では、単に「どうしたらレポートが書きあげられるのか」といったノウハウにとどまらず、なぜその作業が必要か、なぜ自ら問いを立てて学ぶことが重要か、などの説明がされている。「第1章 アカデミック・スキルズとは」で、「2.「知」とは、「教養」とは」「3.「知」と「教養」を伸ばす」など項目立てにして詳しく解説しているところが、他の2冊にはない特徴である。各章の終わりにある小さな「テスト」は、初年次生にとって学びを確認するための学習の手助けとなるだろう。「第5章 情報整理」もこのテキストの特色である。同じ「情報整理」でも A.はインターネットで得た情報をパソコンで整理する方法が紹介されているが、B.では KJ法など、ペンと紙による方法の紹介である。情報カード、読書カードの作り方については用意する文具まで詳細な説明がされている。「事項カードと発想ノートを使いこなす」（p.106）方法の紹介も、ほかの2冊には見られない特徴である。

C.は、A.B.と違い緑と黒の2色刷りで、イラストもふんだんにあるため初年次生は入りやすいと思われる。マメ子（良い学生）とノリ太（良くない学生）という対照的なキャラクターを登場させた、「レポートの書き方②」（p.46-51）、「ゼミ発表の準備をしよう」（p.74-79）でのイラスト解説は、「学生として好ましいこと、好ましくないこと」の違いが明確になり、理解しやすいだろう。イラスト解説はこのほか「ゼミ発表の仕方②」の「発表しよう」（p.82-83）、「質疑応答の時間」（p.84-87）にもあるが、この「質問に答えよう」（p.85）「質問をしよう」（p.87）

などの内容は A.B.には見られず、C.だけの特徴である。同じく C.だけの特徴として、第10章「大学の試験と評価」の中の「大学の筆記試験」では「どう答えたらいいの？」（p.90）や「試験問題と解答の例」（p.91）、「試験前の勉強はどうしたらいいの？」（p.92）がある。「第Ⅲ部 大学生の基礎知識」の「大学生活 Q&A」では「Q4 空き時間はどのように過ごしたらいいですか？」「Q5 教科書はすべて買うべきですか？」「Q6 大学の先生には何と呼びかけたらいいですか？」「Q10 授業を休むときはどうしたらいいですか？」（p.116）といった質問が15あり、それぞれに答えがある。たとえばQ4に対する回答は「高校までとは異なり、時間割の組み方によっては、空いている授業時間が出ます。基本的には自由な時間なので、たとえば図書館で読書や予習をしたり、食堂やカフェで友だちと過ごしたりすることもできます。クラブやサークルの部室に行く人もいます。大学内でお気に入りの場所ができるといいですね。」などとなっている。大学生活における非常に基本的なことがらについて、どこへ尋ねたらいいのかわからないような質問もこのような形で確認することができるのは、初年次生にとってありがたいことだろう。

近年人気のある大学初学者用テキスト3冊を比較・整理し、共通することがら、それぞれの特徴的な内容を確認した。これらを踏まえ、次項からは筆者のかかわる初学者のための授業を振り返り、内容とコースデザインについて考える。

2. 「スタートアップ演習 A」について

（1）この授業における日本語能力育成が目指すもの

「大学における専門科目を学ぶためだけでなく、また社会人としての礎を築くため、基礎科目である数学と国語をそれぞれ隔週で学修する。」と「スタートアップ演習 A」2019年度のシラバスにあるように、この授業における日本語力に対する期待は学生生活、就職活動、社会人に必要な基礎知識の習得、思考・理解力を鍛えるところにある。日本語力4技能（聞く・話す・読む・書く）のうち、「読む・書く」を担う授業であるといえよう。初年次生全員必修という多人数が履修する科目のため、「聞く・話す」の

ような音声言語の指導には限界があるということ、またこの科目とは別にプレゼンテーションに重点を置く授業があるため、「聞く・話す」に関しては主としてその科目に委ねているという現状である。

(2) 過去3年の取り組み

筆者がこの科目に関わるようになった3年前からの取り組みについて整理する。以下に8回分(8回の授業は数学と45分ずつ)の授業内容について、3年間を比較する。

最初に担当した2017年度を基本とすると、2018、2019年度は構成内容とコースデザインに変更がある。以下にその変更の理由を整理する。

〈2017年度→2018年度〉

①構成内容について

なくしたものは「レポートの書きかた」(3回)、「就職試験作文」(5回)と「SPI練習問題」(8回)、それに代わり新たに「四字熟語カード作成」(3回)、「コママンガから新聞記事を書く」(4回)、「コママンガを文章化する」(7回)を取り入れた。

変更の理由は、まず「レポートの書きかた」だが、これは別の科目(初年次生必修授業の「戸板ゼミナール」)の初年次教育で担うことになったためである。また、全3回(1、5、6回)で行っていた「就職試験作文」は、2018年度には2回の授業にまとめ、1回目で書いた初年次生の400字作文一つひとつに、教員がコメントを書いて6回目で返却するという内

表2 「スタートアップ演習A」3年間(2017～2019年度)の15回授業内容(国語のみ)

| | 2017年度 | 2018年度 | 2019年度 |
|---|--------------------------------------|---|---|
| 1 | 授業説明、SPI練習問題、400字作文「私がこれまでで最も感動したこと」 | 授業説明、400字作文「短期大学生にとってアルバイトは重要か」 | 授業説明、400字作文「短期大学生にとってアルバイトは重要か」 |
| 2 | 図書館ガイダンス、クリティカルシンキング(表・グラフを読む) | 図書館ガイダンス、報告書(事実を述べる文章)の書きかた | 慣用句カード作成 ^② |
| 3 | レポートの書きかた | 四字熟語カード作成 ^② | 図書館ガイダンス、文章推敲 |
| 4 | 報告書(事実を述べる文章)の書きかた | 四字熟語グループワーク、コママンガから新聞記事を書く | 慣用句グループワーク、要約の練習、クリティカルシンキング(表・グラフを読む) |
| 5 | 就職試験作文「理想の社会人」というテーマで書かれた文章を読み、添削する | 四字熟語グループワーク、クリティカルシンキング(表・グラフを読む) | 慣用句グループワーク、要約の練習、新聞に親しむ |
| 6 | 400字作文全員にコメントをつけて返却、文章を推敲する | 四字熟語グループワーク、400字作文全員にコメントをつけて返却、文章を推敲する | 慣用句グループワーク、要約の練習、コママンガから新聞記事を書く |
| 7 | 文章を要約する教材『シンデレラ』 | 四字熟語グループワーク、コママンガを文章化する | 慣用句グループワーク、論理的な文章を書くために(要旨をまとめ、意見文のアウトラインを書く) |
| 8 | SPI練習問題① | 前回書いた文章を要約する | 慣用句グループワーク、400字作文全員にコメントをつけて返却→課題文を読み、要旨を捉え意見文を書く |

※下線は前年度にはなかった新しい内容をあらわし、矢印は前年度からのコースデザインの変化をあらわす。

①全15回のうち数学と国語の授業は7回ずつであるため、第8回目の授業は45分ずつ、数学と分けてもつことになる。

②四字熟語カード作成45分、残りの45分は数学のSPI模試である。

③慣用句カード作成45分、残りの45分は数学のSPI模試である。

容とした。「SPI 練習問題」に代わり入れたものは「四字熟語カード作成」であるが、これは就職活動に欠かせないグループ・ワークのための素材作りである。これ以降の授業のはじめには毎回作成したカードを使い、グループ・ワークによって四字熟語を身につけてゆくというねらいである。この年度に新たに導入した「コママンガから新聞記事を書く」、「コママンガを文章化する」は、絵から得た情報を文字化するという練習である。教材のコママンガはセリフのないもので、絵に描かれた情報を丁寧に読み取らなければ文字化することはできない。「読む」ことを感覚的に行ってしまうことの多い学生のために、詳細な情報取得のトレーニングとして導入した。

②コースデザインについて

4回目から2回目に移動したのは、「報告書（事実を述べる文章）の書きかた」を「コママンガから新聞記事を書く」という授業の前に置きたかったからである。新聞記事は、事実を報告する文章のため、物語文やレポートとは文章のタイプが異なる。多くの初年次学生は新聞記事の文章に不慣れで、そのことを認識させてから記事を書く練習に入りたかった。翌回に新聞記事を書く授業を設定できなかったのは、「四字熟語カード作成」とペアを組む数学の「SPI 模試」のねらいからきている。早期に SPI 模試（30分）を学生に体験させることが学生の以後の勉学に対するモチベーション向上につながるのではないかという担当者の考えにより、3回目に組み込まれた。残り半分の45分で行う「四字熟語カード作成」は、学生同士がまだ特定の友人関係を作る前の早い段階でグループ・ワークを行うことが重要であると思われるので、ここに置いた。

新聞記事に関わる演習をした後に「クリティカルシンキング（表・グラフを読む）」を置いた理由は、「新聞を読むためには、表やグラフを読む力が必要である」という学生の学びへの意識向上をはかりたかったためである。

また、2017年度に行った「文章を要約する」（7回）では、学生が文字の多い教材を丁寧に読まずに感覚で要約を行うということが目についたため、

2018年度の要約の授業を考える際には学生が知らない内容の教材を使うこと、内容をよく理解している素材を探すことにポイントを置いた。そこで2018年度では、7回目に自分がコママンガから文字化した文章を、8回目の授業で要約の素材とすることにした。自分が文字化したものであれば、内容もよく理解しているはずだからである。

〈2018年度→2019年度〉

①構成内容について

なくしたものは「報告書（事実を述べる文章）の書きかた」（2回）、「コママンガを文章化する」（7回）である。新たに入れた内容は、「新聞に親しむ」（5回）、「要約の練習」（4、5、7、8回）、「論理的な文章を書くために（要旨をまとめ、意見文のアウトラインを書く）」（7回）、「課題文を読み、要旨を捉え意見文を書く」（8回）、である。

まず「報告書（事実を述べる文章）の書きかた」をなくしたのは、「事実を述べる文章」を書く場面は就職活動や学生生活には少ないことから、新聞記事という事実を述べる文章の練習（6回）と、一つにまとめたからである。「コママンガを文章化する」授業については、要約の練習の素材づくりのための前段階として2018年度に設定したのだが、特に効果は見られなかった。そこでレポートを書くためにも重要な「要約する力」育成のための練習を2019年度は増やすことにし、別の方法で要約力をはかるため「コママンガを文章化する」授業は2019年度の授業から外すことにした⁴。

2019年度は前年度に引き続き「大学における専門科目を学ぶためだけでなく、就職試験に向けて、また社会人としての礎を築くため、基礎科目である数学と国語をそれぞれ隔週で学修する」ことを授業の目標とした。ゴールとして最終授業を「課題文を読み、要旨を捉え意見文を書く」（8回）ことに設定し、「論理的な文章を書くために（要旨をまとめ、意見文のアウトラインを書く）」（7回）は、そこに向けての新たな内容となっている。

「新聞に親しむ」授業を新たに入れたのは、前年

⁴経緯の詳細は村木（2018）参照。

度の反省からである。2018年度はある程度「新聞とこういうものだ」という前置きをしてから「コママンガから新聞記事を書く」練習に入ったのだが、常体で文章を書くことのできない学生が多出し、予想以上に学生は日頃から新聞に慣れ親しんでいないという現状が明らかになった。そこで社会とつながり生活することに意味を見出すための「新聞に親しむ」という時間を作り、「コママンガから新聞記事を書く」と連続して設定することで、学生が新聞と関わりを持つ授業とした。

「要約の練習」は20分ほどの練習を複数回入れることにした。「要約する力」の育成は2017、2018年度のように1、2回程度の授業では困難であるので、短いトレーニングを複数回導入することで徐々に要約することのコツを学生がつかめるように配置した。そして後に行う「課題文を読み、要旨を捉え意見文を書く」授業において課題文をある程度まとめる際に効果が出ることを期待した。

あとは細かいことだが、カード作成における「四字熟語」から「慣用句」への変更である。学生が四字熟語より苦手で得点に結びつけることが困難な慣用句を、グループ・ワークで学ぶことによって少しでも身につけられることをねらい、変更した。

②コースデザインについて

前述のとおり、2019年度は最終授業に「課題文を読み、要旨を捉え意見文を書く」（8回）を設定し、そこにつながる授業を段階的に置くという全体を考えた。

前年度から2回と3回の内容を入れ換えた理由は、数学のSPI模試を早期に学生に体験させることを、さらに前倒しにしたためだ。また前年度6回だった文章推敲の授業を3回へと移動したのは、1回目の400字作文の授業と隣接させたかったからである。3回目の授業内容が、1回目と同じテーマで書かれた作文の好例・悪例を読み、ふさわしい日本語表現を学んだうえで、改めて返却された自身の作文を見直し推敲したのち再提出するというものだからだ。

前年度は新聞記事に関わる演習をした後に「クリティカルシンキング（表・グラフを読む）」を置いたが、2019年度は順序を逆にした。まず図表の読み取りについて学び（4回）その後「新聞に親しむ」

（5回）「コママンガから新聞記事を書く」（6回）とし、論理的な文章の読み書きに慣れたところで、これまでの授業が生きることを期待し「論理的な文章を書くために（要旨をまとめ、意見文のアウトラインを書く）」（7回）、「課題文を読み、要旨を捉え意見文を書く」（8回）の流れで配置した。

要約の練習は前述のとおり前年度の反省から、4回目から5回、6回と継続して置き、「論理的な文章を書くために（要旨をまとめ、意見文のアウトラインを書く）」（7回）で短い文章の要旨を捉える練習、そして「課題文を読み、要旨を捉え意見文を書く」（8回）へとつながるように計画した。

（3）前年度から変更したコースデザインの実践結果

2017年度に短期大学生に求められる言語能力として要約の力に注目し、翌2018年度に授業実践したが十分な効果がみられなかったため、それを踏まえ2019年度は「課題文を読み、要旨を捉え意見文を書く」ことを最終目標に、段階的に要約の20分程度の練習を3回、そして400～700字程度の文章を読み要約する練習を1回入れた。しかし授業中に聞こえて来た学生からの反応は「最後の要約課題と、それまでの要約練習のギャップが大きすぎる」といったものであった。ゴールを設定しそこへ向けてのトレーニングとして用意した練習が適切ではなく、最後の課題に生かされなかったということだろう。練習問題の具体的な内容は以下のとおりである。

表3 2019年度「スタートアップ演習A」の要約練習内容

| 授業回数・メインテーマ | 要約練習の内容 |
|---------------------------------|---|
| 4回 クリティカルシンキング （表・グラフを読む） | ①60文字の文章→35字以内（31～35字）の一文に書き直す ②100文字の二文→50～60字の一文に書き直す ③短文二文を一文にまとめる |
| 5回 新聞に親しむ | ①4つのキーワードから共通する要素を抽出し、タイトルをつける ②100文字の二文→50～60字の一文に書き直す ③短文二文を一文にまとめる |
| 6回 コママンガから新聞記事を書く | ①「見出し」を考えるために役立つ要約練習 3つの短文から共通する要素を抽出し、タイトルをつける |
| 7回 | ①400字程度の文章を読み、空欄を埋める |

| | |
|------------------------------------|---|
| 論理的な文章を書くために（要旨をまとめ、意見文のアウトラインを書く） | かたちで要旨をまとめる ②400字程度の文章を読み、著者の主張を一文でまとめる ③700字程度の文章を読み、100字以内で要約する |
| 8回 課題文を読み、要旨を捉え意見文を書く | 課題文（1600字程度）を読み、以下の①～③を行う ①現代の「知ること」とは、どういうことだと筆者は述べているか ②筆者の考える「知ること（学問をすること）」は、どういうことか ③空欄に言葉を入れ、課題文の要旨をまとめる |

3回の要約練習が生かされなかった理由として2点考えられる。1つは練習回数の少なさである。この「スタートアップ演習A」は数学と日本語の授業が隔週で行われるので、コースデザイン上関連する内容が連続しているようであっても、実際に翌回は2週間後となる。2週間おきになれば月に2回の練習となり、毎週の授業に比べると練習量は半分になる。授業内だけの練習ではなく、プリントを配布して課題にするなど要約練習の機会をできるだけ多く作るなど工夫が必要であった。

2つ目は、練習内容の検討不足である。第8回で設定した課題文の量はA4サイズの紙一枚分であった。目標に「課題文を読み、その要旨を捉える」ということがあるならば、その課題文の分量に近づけた文章の要約練習を用意すべきであったが「要約のコツさえつかめば、文章が長くなっても支障はないだろう」という甘い予測があった。実際に行った練習はいずれもキーワードや短文レベルの要約であり、目標達成までに力をつけられる練習内容ではなかったようだ。また2018年度も2019年度も、学生が要約練習で捉えた要旨を「うまくまとめること」、つまり「書く」ことによって教員はその成果を見た。そのため「書く」ことのほうに注意がいったしまったが、そもそも要約は「読んだ文章の主旨をつかむ」「筆者の主張を捉える」という「読み」のトレーニング

ングにあるだろう。この「読み」の練習不足も、要因だと考えられる。

3. 新しいコースデザイン

（1）「スタートアップ演習A」授業の目標の確認

これまでの考察を踏まえて日本語基礎能力育成のための新しいコースデザインを考えるにあたり、あらためてこの授業で学生につける力を確認する。2019年度のこの授業における日本語力に対する目標は、学生生活・就職活動・社会人に必要な基礎知識の習得、思考・理解の力を鍛えることある。日本語力4技能（聞く・話す・読む・書く）のうち、「読む・書く」を担うものであった。

しかし行った授業を振り返ると、「書く」ことのトレーニングに重きが置かれ、「読む」ことは「書く」ための単なる素材という役割になっていたように思われる。たとえば、全8回のうちある程度まとまった文章を読んだのは「新聞に親しむ」（5回）、「論理的な文章を書くために（要旨をまとめ、意見文のアウトラインを書く）」（7回）、「課題文を読み、要約し、意見文を書く」（8回）の、3回のみである。次年度のコースデザインを考えると、「読む」、「書く」のバランスを考慮すべきであろう。

これまでの授業で学生の日本語基礎能力向上に際立った効果が見られなかったこと、また、本稿1.の「初年次教育における日本語力育成のための学習項目」で確認した、大学初年次生向け市販テキスト3冊に共通する8つの構成内容を踏まえ考えられることは、初年次生の日本語能力向上のためには、問題を解く以前の力を養うことに重きを置いたほうがよいのではないかということである。

短期大学生は四年制の大学生に比べて就職活動が早く始まるため、「就職試験合格に向けて」という性格の濃かったこれまでの授業では、新卒採用試験の定番であるSPI試験の問題が解けるようになることを重視し、そのための教材作りもしてきた。しかし「学生の生徒化」⁵という言葉が登場するように

⁵新立慶（2010）によれば、「近年の学生達の状況が変わっていく中で、新たな学生のタイプを示す言葉の一つとして「生徒化」という言葉が使われるようになった。この「生徒化」という言葉は社会学やキャリア教育等の研究者達を中心に使われるようになり、言葉としてある程度定着し始めていると言える。「生徒化」はどちらかといえば学生の「未熟化」や「幼稚化」といった「ネガティブなイメージ」を持つ言葉として使われている傾向にある。」（p.67）とある。

なった近年、多くの学生が、学びは提供されるものと捉えて与えられた環境の中で成績にカウントされる演習のみに関心を示し、結果をいかに早く出すかを重視する傾向にある。こうした流れのなかで初年次学生に日本語の基礎能力をつけるために必要なこととは、実践的な練習問題を数多く解くこと以前に、学び得たことを身につけるために必要なスキル、すなわち情報整理のしかたや論理的文章の読みかた、質問のしかたなど、学ぶための基礎的技術により重きを置いた授業のコースデザインを組み立てる必要があるのではないだろうか。

(2) 新しいコースデザイン案

次年度(2020年度)の「スタートアップ演習A」を、問題を解く以前の力を養うことにより力を入れて組み立てることとして、本稿1.で確認した市販テキスト3冊に見られる8つの構成内容と比較する。

まず、①大学生としての心がまえ、②ノート・テイキング、これらの内容については「戸板ゼミナール」の初年次教育の授業で、そして、⑦発表のしかたは「プレゼンテーション」の授業で扱うことになっている。④大学図書館の使いかたと⑥ライティングは、すでに「スタートアップ演習A」で実施している。

整理すると、初年次生に有用だと考えられる、学ぶための基礎的技術8つの内容のうち、③リーディング、⑤情報収集、⑧情報整理の3つが、現時点の「スタートアップ演習A」において弱いことがわかる。

そこでこの3点を補い、現実可能な範囲で新たなコースデザインを試作した。2020年度の半期授業のゴールを「課題文を読み、要約し、意見文を書く」ことにした場合のコースデザイン案である。

表4 2020年度「スタートアップ演習A」のコースデザイン案
(※下線は新しい内容)

| | 2019年度 | 2020年度 |
|---|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1 | 授業説明、400字作文「短期大学生にとってアルバイトは重要か」 | 授業説明、400字作文「短期大学生にとってアルバイトは重要か」 |
| 2 | 慣用句カード作成 | 図書館ガイダンス、文章推敲 |
| 3 | 図書館ガイダンス、文章推敲 | グループワーク、クリティカルシンキング、 <u>質問を作る</u> |
| 4 | 慣用句グループワーク、 | グループワーク、 <u>リーディ</u> |

| | | |
|---|--|--|
| | 要約の練習、クリティカルシンキング(表・グラフを読む) | ング(1)新聞に親しむ 情報収集 |
| 5 | 慣用句グループワーク、要約の練習、新聞に親しむ | グループワーク、リーディング(2)学術的な文章を読む 情報整理① |
| 6 | 慣用句グループワーク、要約の練習、コママンガから新聞記事を書く | グループワーク、ライティング(1) 情報整理② |
| 7 | 慣用句グループワーク、論理的な文章を書くために(要旨をまとめ、意見文のアウトラインを書く) | グループワーク、ライティング(2) 論理的な文章を書くために(意見を持つ・アウトライン作成) |
| 8 | 慣用句グループワーク、400字作文全員にコメントをつけて返却→課題文を読み、要約し、意見文を書く | グループワーク、400字作文全員にコメントをつけて返却→課題文を読み、要約し、意見文を書く |

新たに入れた内容は「質問を作る」、「リーディング(1)新聞に親しむ 情報収集」(不足⑤に対応)、「リーディング(2)学術的な文章を読む 情報整理①」(不足③⑧に対応)、「ライティング(1) 情報整理②」(不足⑧に対応)である。

「質問を作る」ことは、大多数の学生に苦手意識があると見たため、これまで行っていた作成したカードを使用したグループワークの活動内容を変更することを考えた。たとえば「今日の自分の気になるニュース」を学生が選び、グループ内で自分の知らない言葉やできごとについて質問し合う。質問を作ることにより、時事問題や社会情勢に関心が向き、語彙を増やすこともねらいとする。

また、スマートフォンの操作は早いのが、パソコン操作となると検索にどのキーワードを入力すべきなのか悩んで相談に来る学生が少なくない。解決策として情報収集の授業を図書館だけでなくインターネットで、また新聞記事という教材を通して行うことで、学生が社会情勢に興味を持つ機会にもなると考え「リーディング(1)新聞に親しむ 情報収集」を設置した。

「リーディング(2)学術的な文章を読む 情報整理①」は、小説以外の長文を読むことに拒否反応を示す学生を想定し考えた。最終授業で「課題文を読み、要約し、意見文を書く」ためには、ある程度難

解な語彙にも慣れておく必要がある。今年度学生から聞かれた「最後の課題と、それまでの練習のギャップが大きすぎる」という感想を持たれることのないよう、この内容を新たに導入し、また、わからない言葉と出会った場合には調べてその情報をどのように整理したらよいのかということも学生に示そうと思っている。

「ライティング（１）情報整理②」は、「リーディング（２）学術的な文章を読む 情報整理①」につながる内容として連続して設定した授業である。文章を読んでわからない情報を調べ整理し、さらに読み取った情報を自分の意見としてまとめる場合にはどのような整理のしかたがあるのかを提示する。この授業を入れることで翌回の「ライティング（２）論理的な文章を書くために（意見を持つ・アウトライン作成）」とのつながりを円滑にすることをねらいとする。

4. 結論と今後の課題

市販の大学初年次生向けのテキスト３冊を整理・確認し、またこれまでの授業実践を振り返ることで確認されたことは「実践的な練習問題を数多く解くこと以前に、学ぶための基礎的技術により重きを置いた授業のコースデザインを組み立てる必要がある」ということであった。これを乗り越えるため、次年度に向けた日本語基礎能力育成のための新しい「スタートアップ演習 A」のコースデザイン案を提示した。

しかし、今後課題も残る。まず、日本語基礎能力育成のためには、隔週ごとの全８回の「スタートアップ演習 A」だけでは練習量が少ないのではないかとことだ。この解決策としては筆者が担当するほかの初年次授業、日本語関係の授業（「戸板ゼミナール」、「日本語コミュニケーション」）で補うことが考えられる。またこうした前期・後期の授業だけでなく、入学前教育も視野に入れ考えることができるだろう。一方でこうした学習習慣的な活動は定期的に行わなければ身につかないのではないかと懸念もある。今後、試行錯誤すべき課題である。

また、限られた時間で基礎能力を育むことを目標とするならば、授業内容の精査が必要であろう。その回の授業で伝えなくてはならない重要な要素を抽出し、それをどのような順序で学生に提示していく

のか、教材はどのように作るべきなのか、教案の考察が必要であろう。授業改善のためにも教員自身のポートフォリオ活用など、今後検討の余地があるだろうと思われる。

おわりに

医師であるエリザベス・キューブラー＝ロスは、それまで見過ごされていた患者の「象徴言語」（口から出る言葉ではない、心の言葉）に心耳を傾け、死にゆく患者から積極的に学ぶ姿勢を作ることにより、近代化によって欠落した多層的な人間の命の意味を復活させたという捉え方もある。それに倣い、学生から学ぶ態度、学生の「象徴言語」を聞く姿勢を忘れずにいることができれば、授業の改善も本質的なところまで深めることができるのかもしれない。

短期大学生の日本語力育成のために、これまで主に「要約の授業」に焦点を当てていたが、今回コースデザイン全体を捉え直すことにより見過ごしていた課題に気づくことができた。これを敷衍させ、一見しただけでは見えないものの中に実は大切なものが眠っているのではないかとことを授業にあてはめて考えてみると、普段の授業の中における「象徴言語」としてたとえば以下のようなものが考えられる。

- ・授業中、学生の何気ない一言から気づくことのできた教員側の説明のわかりにくさ、配布資料の見にくさ
- ・授業中に学生がうかべる不安そうな表情、迷っているような目の動き
- ・授業中、教員の発言に対して示した学生の意外な反応
- ・授業中に学生の疑問にどうにかして応えようとする中で、その場でできた良い説明やたとえ話

いずれも学生との真剣なやり取りの中でしか発見できないことである。そしていずれも「一見重要とは思えないもの」「うっかり見過ごすもの」である。

日常の学生とのやりとりから生じるこれらの貴重な授業改善の鍵を十分気にとめず、授業振り返りの対象を学生の態度や言葉といった録画や録音など目に見える資料だけに頼っていては、振り返りの本質には及ばない、ということであろう。

学生（あるいは患者）が本当は口に出したくても教員（あるいは医師）という権威の前では言い出せない、ということがある。今後、こうしたことを視野に入れつつ教育実践を行い、試行錯誤を重ねていきたい。

pp.65-74

- ・村木桂子（2018）「短期大学初年次の言語教育における要約指導の基礎研究」『戸板女子短期大学研究年報』第61号、pp.51-58

参考文献

- ・新立慶（2010）「大学生の「生徒化」論における批判的考察」名古屋大学『教育論叢』第53号 pp. 67-75
- ・池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹（2001）『成長するティップス先生』玉川大学出版部
- ・エリザベス・キューブラー＝ロス（1998）『死ぬ瞬間一死とその過程について』完全新訳改訂版、読売新聞社
- ・大島弥生（2007）「大学生に期待される日本語能力とその養成手法—先行実践の分類をもとに—」『言語文化と日本語教育』第33号 pp.109-112
- ・大島弥生、二通信子、因京子、山本富美子（2008）「大学・大学院の学術コミュニティへの新規参入者に対する日本語表現能力育成の可能性：専門日本語教育分野の蓄積からの支援策を考える」『大学教育学会誌』第30巻2号 pp.59-61
- ・学習技術研究会 編著（2002）『知へのステップ—大学生からのスタディ・スキルズ—』第5版、くろしお出版
- ・佐藤望編著（2006）『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門—』第2版、慶応義塾大学出版会
- ・世界思想社編集部編（2018）『大学生学びのハンドブック』4訂版、世界思想社
- ・畠山真一（2010）「日本語表現能力育成のデザイン」『尚絅学園研究紀要 A.人文・社会科学編』第4号 pp.25-38
- ・松浦照子編（2017）『実践 日本語表現—短大生・大学1年生のためのハンドブック』ナカニシヤ出版
- ・村木桂子（2017）「戸板女子短期大学初年次教育における言語教育のための基礎調査」第60号、

